**週刊やすいゆたか再々刊28号18年10月31日**

**近刊予定『日本建国☆十二の謎を解く☆万世一系の真相』に関連して  
２、「日本」再発見、天照大神が建てた国**

狭山五郎:三貴神が三倭国を建てたというのがやすいさんの「三倭国仮説」ですが、実際は吉備だと高志(越)だとか尾張、駿河とかたくさん倭国はあったのでしょう。  
  
やすいゆたか:なにしろ記紀伝承から推理しているだけですから、実際には壱岐・対馬の海原倭国の人々は大八洲各地と交易していて、各地に拠点を作ったりしていましたので、倭人の集落が各地にあったと思われます。ただどの国が倭人の支配下にあったかを認定する場合に、三貴神が三倭国を建てたというのが伝承の古層にあったと考えられるので、河内・大和に天照大神の太陽神の国、筑紫に月讀命の月地国、そして紆余曲折のうえに出雲に建速須佐之男命の出雲倭国が建国された、この３つが代表的な倭国だったと言えますね。

狭山:その中でも一番日本建国史にとって、重大な問題提起は、天照大神自身が海下りして、河内湖の辺りに草香宮を建て、太陽神の国を建てたという仮説ですね。それは原「日本国」ともいうべきものですから、日本史の端緒とも考えられるわけでしょう。

やすい:しかし三貴神が三倭国を建国したという仮説に対して、『千四百年の封印ー聖徳太子の謎に迫る』で提起してから丸三年たちますが、古代史のプロパーはいまのところシカトしていますね。  
  
狭山:だって、三貴神は神話上の登場人物で、架空の神々ですから、あくまで観念上の存在とされています。実際に船に乗って河内湖にやってきて宮を建てたなどというのは、やすいさんの単なる思いつきであり、妄想の産物でしかないと思っているでしょうからね。古代史研究家の殆どは。だから三貴神が実在したという証拠でも示さない限り、議論の対象にはならないでしょう。  
  
やすい:神武天皇以降を人代、それ以前を神代と言いますね。それじゃあ、神武天皇以降は実在の歴史で、それ以前は神話として創作された架空の物語にすぎないのですか？

狭山:歴史上実在した最古の天皇は、神武天皇と同じ「ハツクニシラススメラミコト」と呼ばれていた御間城入彦大王(応神天皇)だと云われています。  
  
やすい:それは西暦四世紀初めですね。しかしそれ以降の大帯彦大王(景行天皇)やその息子日本武尊、帯中彦大王(仲哀天皇)、息長帯比売命(神功皇后)なども架空とされています。つまり神話上の神だから架空で天皇なら歴史上の実在とは限らないわけです。

狭山:だって磐余彦大王(神武天皇)の場合は、紀元前六六〇年に大和政権を樹立したことになっていますが、その頃は畿内は縄文時代ですからありえません。そして一代20年平均として紀元後二世紀初めとしても、二代目から九代目までの事績の記録はなく、これも天皇家の支配が長かったことにするための粉飾で実在しなかったとしたら、実は神武天皇と崇神天皇は同一人物だったと考えられます。

やすい:磐余彦は東征して大和政権を樹立した大王ですが、御間城入彦大王は、倭大国魂命の祟りをなんとか治めた大王であって、明らかに内容が違います。任那の城に入ったから御間城入彦だという解釈もありますが、その後大八洲に渡り、大和に侵攻したのですか、そしたらその時に大和には饒速日王国があったのですか？それとも邪馬台国が大和にあったということですか？

狭山:それについては諸説紛々ですね。もちろん神武天皇実在説もあり、磐余彦東征は**二**世紀初めにあったという解釈もありますし、邪馬台国と饒速日王国は実は同じだったという解釈もあります。  
  
やすい:大国主命の出雲帝国も邪馬台国や饒速日王国と同一視して、四世紀初めに畿内・出雲・山陽・北四国に勢力を張っていて大国を筑紫勢力が圧倒して国譲りさせたという解釈まであります。それではあまりに何もかも一緒くたというか、ごじゃごじゃですね。それより二世紀初めに磐余彦東征があり、饒速日王国が倒されたいう解釈が筋が通ります。

狭山:ただ饒速日神は磐余彦大王の臣下になり、物部氏の族長になっていますが、大国主命が出雲帝国の本拠を三輪山に置いたときはどうしていたか分かりません。しかも、饒速日神が天下りして、饒速日王国を建てたことになっていますね。つまり神話的に語られていて、時空を超越していますから、歴史上の人物として論じることはできないわけです。

やすい:そのことを何故歴史学者は論じないのかということが問題なのです。饒速日神は大王として支配していたわけですから、現人神だったと考えられます。とすると人間ですので、当然年をとると死にます。でも饒速日神は神政政治を継続するためには必要なので、世襲されたと考えられます。すると天照大神の孫の饒速日一世は大国主命の畿内侵攻でなくなりました。その遺児の宇摩志麻治命が、武御雷命の率いた奇襲軍を畿内から撃退して、饒速日王国を再建して、饒速日二世になったのです。

狭山:そう言えば、饒速日二世という言い方はありませんね。当然現人神なら磐余彦大王の臣下になった饒速日神は饒速日五世ぐらいの現人神のはずなのに饒速日神としか書いていない。そのことを歴史学者は歴史として問題にしないわけですが、それはおそらく神話だから現実視していないからでしょうね。ただ記紀では人代に入るから、そのあたりきちんとして欲しい気もします。ただ現代の研究者は、架空視しているので、そのあたりの矛盾は気にならないのかもしれません。  
  
やすい:しかし饒速日王国とかそれを一時滅ぼした出雲帝国がなかったとかは言えないわけですね。国譲り説話というのも、その実際はどういうものだったか想像の域はでないけれど、歴史学者だって、頭ごなしに出雲帝国の存在を架空とは決めつけられないでしょう。

狭山:そうするとそれぞれの勢力の元になった河内・大和倭国、筑紫倭国、出雲倭国があって、それらはやすい仮説では三貴神が建国したと考えられるのではないかということですね。  
  
やすい:その三貴神が兄弟だったというのは、三倭国が仲良く共存するための設定かもしれませんが、当然海原(対馬・壱岐)からやってきて、文化的な優位性を武器にして建国したと考えられ、高海原のコントロールを受け、海原の水運で倭人通商圏にまとめられていたということです。

狭山:ですからやってきたのは三貴神だということになったのは、後世の潤色で、神が支配する宗教国家でなかってもいいのじゃないですか？

やすい:もちろん可能性を考えるとどうとでも解釈できるのです。こちらも天照大神の現人神が河内湖に来て、草香宮を建てた跡とか同時代文献とか物証はないわけですから。でも建国というのはそれに関わった人々にとっては、是非とも語り伝えなければならないことであったので、伝承として伝えたと考えられます。それは後の都合で改変されたけれど、そのことによって矛盾が生じているので、それを手がかりにして、合理的に推理すれば、元の伝承が浮かび上がるということです。  
  
狭山:つまり天照大神は「」なので、大八洲に建国したはずで、高天原に上げられた筈はないということですね。としたら大八洲のどこかだとすれば、孫の太陽神饒速日王国があったと言われる大和・河内がもっとも相応しいということですね。

やすい:それに饒速日神や邇邇藝命の天降りというのは、天空に高天原が存在して、そこに天照大神が住んでいて、孫まで生まれたという前提があります。高天原が天空というのは、伽倻が河内王朝の属国になってしまった五世紀以降の話ですから、海下りを孫の天降りにずらしているわけです。

狭山:「高天原」が朝鮮半島南端部にあって、高海原と呼ばれていたというのもやすい仮説であって、科学的歴史学を唱える人々は高天原なんて架空の観念の世界と考えていますから、全く噛み合わないでしょう。

やすい:しかし伽倻に宗主国が存在し、海原倭国の水運で倭人通商圏が形成されていたと考えますと、出雲帝国による大八洲統合が阻止され、国譲りが強制され、磐余彦東征が成功した事情も説明できます。

狭山:それで天照大神が磐舟で対馬から海下ってきたということですね。それで磐舟なのにどうして沈まなかったのですか？

やすい:あれは木の船だけれど、船底に石を敷き詰めて重石にして、重心を下げ、転覆を防止していたのです。そのかわり浸水すると沈没するので気密性の高いハイテク船だったのです。それで荒海の日本海を乗り切れたので、制海権を得て、倭人が他の渡来人の渡来を制限して、大八洲統合に成功したわけです。

狭山:草香に天照大神の宮があったことはどうしてわかったのですか？

やすい:「日下」で「くさか」と読むのは「の草香」という慣用語があったからです。つまり「太陽神が支配する草香」という意味です。それで河内湖の船着き場の草香に宮を建てたと想像できます。  
  
狭山:そう言えば博多湾にも草香江がありますね。  
その船着き場付近に月讀命が宮を建てたということですか？

やすい:その可能性は大いにありますね。ただ筑紫の場合「月下」で「くさか」とは読みませんので、断定はできませんが。  
  
　　　　　　　　　　　　　　　続く

**教職倫理学おさらい対談**

**『フォイエルバッハ・テーゼ』について**

**「テーゼ」とは**

上村陽一: 『フォイエルバッハ・テーゼ』の「テーゼ」の意味ですが、「定立」という意味と政党などの綱領の意味が載ってましたが、ここでは『ドイツ・イデオロギー』でマルクスがフォイエルバッハ批判の担当だったので、フォイエルバッハに対する批判的な論稿をまとめるための「覚書」のような意味ですね。だったら「ノート」ということですね。

やすいゆたか:要するにフォイエルバッハが実践的な立場に立ちきれていないという線で批判していこうということです。そのためのポイントになる命題をノートしたものです。最初の命題を「テーゼ(定立)」と言います。それに対する反対命題が「アンチ・テーゼ(反定立)」で発展的に両者を綜合したものが「ジン・テーゼ」です。そのように議論を発展させていく方法をディアレクティーク(弁証法)と言います。  
　『フォイエルバッハ・テーゼ』というのは、フォイエルバッハ批判するに当たって、出発点になるような諸命題という意味です。

　　**対象を実践として主体的に捉える**

三輪智子:ところがこの一片のノートがマルクスの思想の真髄を語っているとして、極めて評判が高いということですね。特に第一テーゼは日本近代の代表的哲学者である西田幾多郎が感銘して、「行為的直観」という言葉を生んだという話でしたね。  
  
上村: **「これまであったあらゆる唯物論、それにはフォイエルバッハのものも含まれます。   
 その主要な欠点は、対象(事物)や現実や感性が客体あるいは直観という形式のもとでしか捉えられていなかったことです。   
 つまり感性的人間的活動、すなわち実践として、主体的には捉えられていないということです。」**  
　既成の科学的な見方では物事を冷静に客観的に捉えようとしますから、どうしても主体とは切り離された客観的な事物として分析されてしまい。主体自身の問題として、自分の実践として捉えられない傾向があったということですね。

三輪:物事と冷静に客観的に事物として捉えるということは大切だと思います。マルクスはその必要を否定しているのではなくて、自分自身の問題として捉えられないと駄目だということが言いたいわけですね。例えば労働者階級が窮乏化して苦しんでいるのに対して、フォイエルバッハは、それは労働者の問題であって、フォイエルバッハの問題ではないと言ってるという批判ですね。

やすい:フォイエルバッハは哲学者としてヘーゲル批判の急先鋒になりますが、著述家としてだけでは生計が立たないので陶磁器工場の経営もしていました。だから労働者とは微妙に立場が違います。晩年は工場が破綻して貧困化し、マルクス主義政党に入党しています。だから労働者の問題は本当は他人事ではなかったわけですね。

上村:ただトランプ大統領やブラジルのボルソナロ大統領の言動などみているととても自分自身の実践として主体化などできそうもありません。

三輪:そういう意味ではないでしょう。つまりアメリカンファーストとか自己中心主義とかいう発想は、だれにでもあるのです。普段はそれでは社会性がなく、鼻つまみになりますね。それで利己主義を抑制して、国際協調主義や「ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン」と言っているのだけれど、それがアメリカの場合、対中、対日貿易赤字で頭にきて、本音が出たということでしょう。だから我々もトランプ大統領を見て、もうひとりの自分だと考え、自己中心主義に陥らないで、しかも相手を立ててこそ自分も立つという、フェアーな道を模索すべきなのです。

やすい:グローバル化では進出相手先に雇用や成長をもたらさないと、経済が破綻して、そこから経済難民がアメリカに流入するようになります。だからただ難民を止めるという自国中心主義だけでは駄目で、相手国の経済再建援助とセットで難民対策を共同で立てなければなりません。

　　**教育者が教育されなければならない**

上村: 次に第三テーゼです。**「環境と教育との変化にかんする唯物論的学説(人間は環境と教育が作り出したものなので、環境を変え教育を改めれば、人間を作りかえることができるという唯物論的な教説)がありますが、その教説は、次のことを見忘れているのです。   
　それは、環境こそが人間によってこそ変えられること、そして教育者自身が教育されなければならないことです。(中略)   
　環境を変えることと人間的活動あるいは自己変革は、ただ革命的実践として合致するのだと捉えられますし、合理的に理解されるのです。」**

三輪:抑圧や搾取で多くの人々が苦しめられている環境の中で、良い環境、良い教育で良い人間を育てようとしても、現に悪い環境しかなく、教育者も良い教育を受けていない教師しか居ないのなら、どうしたらいいのかということですね。環境にしても教師にしても人間の実践によって作られたものだし、作り変えることができるということですね。  
  
やすい:環境を変え、教師を変える実践というのは、そういう悪環境、悪条件下と戦いながら、どうしたら生徒自身が学び成長できるか模索し、教育実践を通して生徒からも学んでいって、教師自身が成長するしかありません。革命的実践の中で環境も変革され、生徒も教師も自己変革、自己成長ができるわけです。  
　教育者が教育されるというのはそういう意味で、ベテラン教員やカリスマ教師から新任教員や問題教師が再教育されるという意味ではありません。

上村:例えば、革命的実践を気取って、教師が講義する形をやめて、学生が分担して発表する形に変えるとすると、それで学生に主体的な参加意識が生まれるのはいいとしても、教師が熟練した講義で進めるより、結果として教育効果が大きいということでないと、生徒も学校もそういう教育スタイルの変革は受け付けないでしょう。理屈ではいろんなアクティブラーニングの方法を試みたくても、教育実践となると尻込みしてしまうでしょうね。

やすい:例えば高校などでは受験体制があり、学校が十段階以上に格差付けられたりしていると、それぞれで試みることができるアクティブラーニングの方法も限られてしまいます。しかし教育効果が上がらないということでは、日本の労働生産性が相対的に劣ることになり、国際競争力が低下することになるので、結局いずれは抜本的な教育改革に踏み切らざるを得なくなります。

**人間のアンサンブル規定**

三輪: では次に「人間のアンサンブル規定」について検討しましょう。  
**「フォイエルバッハは宗教的本質を人間的本質に解消します。しかし、人間的本質は個々の個人に内住する抽象物ではないのです。現実には、それは社会的な諸関係の総和(アンサンブル)なのです。 」**

　ここで「**宗教的本質を人間的本質に解消します。」**という意味がちょっと理解できません。

やすい: 原文は「Feuerbach löst das religiöse Wesen in das menschliche Wesen auf.」です。  
löst～aufは分離動詞でauflösenなので「解消する」という訳だと分かりづらいかもしれません。「還元する」と訳した方が通じやすいかも。  
ここで宗教的本質というのは、ヘーゲル哲学の主体というのは結局絶対精神なので、それは神だということです。神というのは絶対者だから全知全能ですね。そういう何でも知っていて、何でもできるというのは、実は人間の類的本質の自己疎外であるということです。  
　個々人は一つの仕事を職業にして、他のことはなんにもできないみたいだけれど、実は潜在的には勉強し、訓練さえすればみんな何でもできるという類的本質を持っているわけです。それを自分のものだと実感できないので、自己疎外して人間から超越した絶対の他者である神として立てて、それに支配されてしまうのです。

そのように個々人に類的本質が内在するかのように言いますが、それは潜在的に、可能性として言えるだけで、現実的には、個々人が発揮できるパフォーマンスは、社会的諸関係によって規定されているのです。

上村:つまり人間の本質を言語や理性や労働や社会性などに求め、それらが人間に備わっているとみなして、現実の人間の行動を理解しようとしてらとんでもない間違いを犯してしまう。現実にはその人が関わった社会関係によって身についたことしかできないし、その中で何をどう考えたり、感じたりするかも規定されるのだから、きちんと社会的諸関係の現実から理解しなければならないということで、コントの社会学と共通する面がありますね。

上村:マルクスは人間の本質を労働として捉えていたのだけれど、この「アンサンブル規定」で、人間の本質を「社会的諸関係の総和((アンサンブル) 」と捉えるように変わったのではないのですか？

やすい:デカルトやパスカルなどの観念論が人間の本質を「思考」として捉えたのに対して、マルクスは唯物論だから「労働」を本質として捉えたというような理解をする人がいましたね。人間の本質は、人間を他の動物一般と区別する特色ですから、言語、思考、労働、社会性など色々考えられます。どれか一つ立場によって選択するというようなものではありません。  
　どの本質が重点的に現れるかは、その人の取り結ぶ社会的諸関係の総和によって決まってくるという主旨で理解すべきでしょう。  
　半世紀ほど前にはマルクス研究家の中で、論争になったことはありますね。それから人間を身体的な実体で捉えるのではなく、社会的諸関係という関係として捉えるべきだという解釈もあったようです。

**肝心なのは世界を変革することである**

上村:では最後に一番かっこいいのをいきましょう。

**「哲学者たちは世界を単にさまざまに解釈しただけです。肝心なのは世界を変革することなのです。」**  
　哲学というのは存在の意味を問うとか、世界の根源を探るとか、原理的に物事を捉えようとする営みなので、哲学者たちは、世界を解釈するばかりで、自分なりの悟りを求めて来たところがありますね。それに対して世界をあれこれ解釈しても仕方ないので、肝心なことは世界を変革することなのだというのは痛烈な批判ですね。

三輪:ただ、哲学者はどうしても根源的にラジカルに世界を捉え返すので、哲学者が描くあるべき姿というのはどうしても、現実から相当隔たっていて、その変革プランは過激なものになりがちです。だから哲学者が現実をそういうように根底的に批判してくれるのはいいけれど、その理念で世界を変革するとなると、大変革になるので、大部分の人々に反撥されることになりかねません。

やすい:それは、現実に満足してしまって変革する必要をあまり感じていないのなら、そういう批評も一理ありますね。マルクスの時代は労働者の窮乏化の現実というのは半端ないものだったので、結局議論だけして何も変革しようとしないというのは、最悪ということですね。  
　現代でも、いじめで自殺に追い込められている中学生にとったらまさしく地獄ですね。あるいはＡＩやロボットの進歩で30年後に雇用は人口の一割未満というのが本当に実現してしまったら、それまでに社会的に有意義な活動に対する所得制度が整備されないと大変なことになります。  
　そのための変革は、中途半端のものではすまなくて、社会は根底的に変わらざるをえません。ですから哲学者は根本的で理想を求めるから怖いとか、哲学者を批判している場合ではなくて、一般人が社会のあり方を根底的に捉え返して、新しい社会を構想する哲学者にならなくてはならないのです。

上村:マルクス自身が哲学を世界を解釈する学問だと捉えていて、それで哲学的な解釈で終わっては駄目で、現実を批判し、克服する実践の立場にたつべきだという「脱哲学」「反哲学」の立場の表明だという解釈もあるのですね。

やすい:ええ、案外哲学研究者の中でもそういう解釈をする人がいますね。そういう人は哲学者を自称するのが恥ずかしいようですね。でも哲学史を紐解きますと、既成の哲学を根底から批判して、新しい時代を切り開く営みが哲学とされてきた面もありますから、マルクスの批判の営みも哲学と言えるでしょう。  
　ただ、21世紀に入り、雇用が人口の本の一握りということになっていけば、マルクス主義的な発想では新しい時代を切り開く上で限界がありますね。

**唯物史観とは**

三輪:マルクス・エンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』一八四五年と『共産党宣言』一八四八年で唯物史観を確立したとされていますね。

社会の発展を捉える場合に、「経済的な土台」の上に、それに相応しい社会制度や国家制度、イデオロギーなどの文化が生まれると捉えるのでしょう。ただし、経済的土台に適合しないイデオロギーは定着しないですぐに廃れてしまうのでしょう。だから若いドイツのイデオローグたちは、思いつきで新時代のイデオロギーを展開しようとしたので、根無し草に終わってしまったということですね。

上村:経済的な立場によってその人の考え方、感じ方が規定されてしまうという「経済決定論」的な見方と受け止められて評判が悪かったのではないのですか。

やすい:マルクスはのちに**「存在が意識を決定する、意識が存在を決定するのではなくて」**とも言っています。これもある意味当然の言葉ですね。それが言えないと、経済法則などは成り立ちません。アダム・スミスの場合だと「大数の法則」ですね。ですからもちろん個々人とってみると様々で資本家なのに革命家になったり、労働者なのに反革命派になる人もいますよ。  
　マルクスは知識人で妻の実家が土地貴族でその遺産に頼りましたし、エンゲルスは資本家でした。しかし彼らは科学的社会主義を打ち出して革命的なプロレタリアートの立場にたったわけですから、階級的な立場によって意識が決まってしまうという「経済決定論」ではありません。  
　とは言え、労働者は労働力以外になにも所有していないので、資本家の搾取によって苦しめられざるをえないので、資本主義的生産関係を克服しても新しい共同体を目指さざるをえなくなるということです。

三輪:過酷な長時間労働や単調な機械化された作業、厳しい搾取であえいでいた労働者が、社会主義、共産主義という労働者が共同して運営する社会を革命によって実現できるようになることを確信させて、人類の幸福な未来を切り開く崇高な存在であるという誇りを与えたのは素晴らしいことだったと思いますね。

やすい:『どん底』の生活をしながらも人類の未来を担うという希望を持ったということはすごい救いですね。

上村:しかし国家権力を掌握して、企業を国有化するというのが『共産党宣言』でも骨子にあったので、そういう体制を確立し、維持するためにはかなり独裁的な権力を産まざるを得なかったということですね。

やすい:安定するまでの間は、プロレタリアの執権(ディクタツーラ)を守らなければならないので、一定期間国家が必要だという考えですね。そのためには共産党の一党独裁が必要だと成ったのはロシア革命以降です。マルクスはあくまでも労働者が話し合って運営する社会主義の枠内で、自由人の連合を目標にしていたわけです。

**史的唯物論の定式**

三輪:マルクスは唯物史観に基づいて、社会の発展段階を５段階に区別しましたね。  
　各時代の生産様式は、２つの要素から成り立ちます。一つは徐々に発達していく生産力です。もう一つはその時代が続く限り変わらない生産関係です。

上村:生産関係というのは生産手段を支配している支配階級と、生産手段は所有していないけれど、直接生産に携わっている被支配者階級です。

三輪:それで生産力が発展すると今までの生産関係が発展の妨げになるので、新しい生産関係に脱皮せざるを得なくなり、新しい生産様式の時代になるという図式ですね。

上村:ただ支配的な生産様式が変化しても、古い生産様式が部分的に残存して、支配的な生産様式を補完する場合もあるわけですね。  
  
やすい:最も生産力が低いのが原始共同体の時代です。まだ私的所有が未発達で、階級もありません。指導者である族長や酋長は世襲ではありません。

上村:それが交換によって私的所有が生まれ、貧富の格差が生まれると、何も持たないものは、身体まで所有されることになり奴隷が生じ、戦争などで捕虜を奴隷にするようになります。

三輪:やがて未開の共同体が分解して、奴隷を所有する主人が支配階級になり、奴隷が主に生産を担う古代奴隷制社会になります。

上村:ギリシア、ローマ時代が想定されていますね。戦争で捕虜奴隷を補給していたけれど、帝国が拡大しきると、補給できなくなります。奴隷はきちんと家庭を持って子育てするということもままならないので、人口が減りますね。それで土地占有権を与えて、農奴にして、年貢を出させることにしたのが中世封建制ですね。

三輪:アジアでも奴隷に当たる奴婢とかいましたが、生産の主力にはなりません。それより専制国家が発達し、人民全体が国家の奴隷みたいな総体的奴隷制が発達しますね。もっとも欧州みたいに私有化された奴隷ではないので、奴隷というのは

無理に当てはめたとも言えますね。

やすい:ええ、史的唯物論の定式を全世界に当てはめようとした教条主義の傾向がありましたね。

現在では教条主義ははやらないので、律令国家の班田制の良民を総体的奴隷制の概念で説明する人はあまりいないでしょう。

上村:領主は年貢率を上げて、農民はギリギリまで追い詰められたりしますね。「百姓は生かさぬように殺さぬように」と家康は言ったようですが、それに対抗して農民一揆、ヨーロッパでは農民戦争などが起こります。そして副業を発展させたり、商品作物を栽培して、富裕化を図ろうとします。

三輪:大航海時代に入ると、交易が盛んになるので、田畑を囲い込んで牧草地にし、羊を飼って、毛織物工場を起こすような領主も現れますし、逆に富裕化した農民が地主化し、農村工場を経営したりして、次第に年貢は地代化して封建制が崩れていきます。

やすい:それで産業革命で資本主義が確立するわけです。インドの綿製品を輸入していたけれど、蒸気機関を使った紡績機や織物機を発明すると、インドから原綿を輸入してイギリスで加工し、綿製品をインドに輸出しても、インドの国内の綿製品より安く作れるようになったわけです。  
  
上村:なるほど、そうして世界中の資源がイギリスに集まり、工業製品になって世界中に輸出されて、資本主義が確立するということですね。

　その場合、支配者階級というのは、資本家階級ブルジョワジーですね。資本家は、生産手段を所有しています。つまり工場、機械を所有していて、原材料・燃料などを取り寄せて、労働者階級に生産させるわけですね。労働者階級は自分の労働力以外は何も所有していないので無産者階級つまりプロレタリアートです。  
  
三輪:それで労働者は資本主義の発達で他の階級の人々が没落して増えるので、どうしても余剰になり、最低限度の生活費で雇用されてしまいます。それで労働者は自分が生み出す価値の半分程度しか労賃としてもらえないので、残りの分は剰余価値として資本家に搾取されてしまうという理屈ですね。  
  
上村:その剰余価値が資本家の収入である利潤の源泉になるのでしょう。だけど資本家にすれば、生産手段を調達したり、労働者を雇用したりいろいろ経営上の苦労があるのだから、利潤は当然の権利と思っていますね。

やすい:その議論は次回に回します。ともかくマルクスは、生産性の向上で労賃にあたる最低限度の生活費が低下するので、労働者階級は窮乏化するし、生産性の発達で、生産量は増え続けるので、過剰生産になって恐慌が周期的に起こると予言しました。労働者はその機会をとらえて革命に起ち上がらないと、ますますひどいことになるということで、革命の必然性を論証したのです。

三輪:実際には革命は起こってませんね。

やすい:それは世界中から集まった富と資源で作った製品を売らないと再生産できないので、本国の労働者の賃金を上げざるを得なくなったので、労働者の生活水準が上昇したからです。それで二十世紀になって革命がおこったのは何故かは次回まわしですね。

上村:マルクスは資本主義の後にくる社会についてあまり論じていませんね。「自由人の連合」だとか、私有財産のない共産主義社会という発想はありましたが、そこに至る過渡期の社会主義についても国家権力で企業を接収して、労働者が運営する社会主義にするという見通しが『共産党宣言』であるようですが。

やすい:それは安易に言えなかったのですが、せめて人権の確立とか、民主主義的手続きの重視とか、話し合いの原則、言論の自由などについて語っていてほしかったですね。

三輪:過渡期としての社会主義と、到達点としての共産主義の違いはどう整理できますか？

上村:一応、社会主義の段階ではまだ反革命を防止するための国家は必要だということでしょうね。そこがバクーニンやクロポトキンなどのアナーキズムとの違いです。それから生産手段については国家や組合が所有するのですが、生活手段は労働者が賃金をもらって、それで私有します。でもそれをため込んで資金を作り、私企業をつくることは制約されます。資本主義に逆戻りしかねないので。

三輪:ということは、共産主義になったら賃金ももらえず、生活手段を私有できないことになってしまいますね。それで困らないのですか。

上村:それが理想だというのが共産主義です。つまりすべての人々の需要を満たす製品を、みんなで作りまして、それを陳列しておき、必要なものをもらいに行けばいい、一切貨幣なんか必要ないというシステムです。そうなれば所有がなくなるので、階級もなくなり、支配するものとされるものの関係がなくなるので、支配の道具である国家もなくなるという理屈です。